

第三章 明治維新と大和売薬

1 政府の薬業政策

はじめは 一八六七年（慶応三）一〇月、徳川慶喜は大政を朝廷に奉還した。討幕派はいわゆる王政復古の大イギリス式 号令を発して、新政府を樹立した。しかし、新政府に反発した旧幕府側は京都に反撃し、鳥羽・伏



局方・薬局方

見の戦いに敗れたのちも、江戸さらに東北・北海道まで落ちのびていった。この一連の戦いを戊辰戦争というが、戦いのあいだ新政府は新しい政治の建設をおしすすめた。

鳥羽・伏見の戦いとき、官兵の負傷者治療にあたったのは、イギリス公使館付の医師ウイリス（一八三七～一八九四）であったし、会津攻略中にもかかれは、そのころの新技术、つまり過マンガン酸カ

リ液の消毒や、骨折には鉄製の副木そえぎをつかうなどの方法で成果をあげ、薩・長軍には信頼されたという。

いっぽう、徳川家への恩顧ということで、医学所頭領の松本良順(一八三三—一九〇七)は、会津へ門弟たちをつれて、旧幕軍の傷兵治療のために従事している。

新政府は英人医師ウイリスを重用したから、とうぜんながらイギリス式の医学・薬学が採用された。わが国の「薬局方」のはじまりである軍医療の「局方」(一八七一年、^{〈薬〉}、^{〈物〉}一九八種取扱)、海軍軍医療の官版「薬局方」(一八七二年、^{〈製〉}、^{〈劑〉}三三〇種取扱)は、いずれも英方であった。

ドイツ医薬へ

新政府は一八六八年(明治元)、旧幕府直轄の開成所・昌平黌・医学所を改称して復興、翌年には昌平黌を大学と改め、開成所を大学南校、医学所を大学東校と改称した。このとき医学所取調御用係であった岩佐純(一八三五—一九二二)・佐良知安(一八三六—一九〇六)らは従来の漢方医・英医を排し、ドイツ医薬法にきりかえることを主張した。その理由としてあげているのは、これまでの蘭学書の大部分はドイツ本の蘭訳であった。それはドイツ医薬がすぐれていたからなのだという。これにたいして、政府内では、これまでのオランダとの関係はなおぎりにはできないが、維新時の英医ウイリスの功績をあげて反対した。とりわけ大学別当の山内容堂(一八七三—一九二七)は岩佐らの上申をきびしく退けている。

そんななか、岩佐らは大学南校教頭のフルベッキ(一八三〇—一九〇七)の応援を得るとともに、佐良は同郷(佐賀)の副島種臣(一八二八—一九〇五)・大隈重信(一八三三—一九一三)らを動かし、ようやく政府高官たちがドイツ医薬の採用に応じたのであった。これはフルベッキが幕末に長崎で、副島や大隈に語学や法律を教えたよしみと、オランダ生まれのかれが、普仏戦争で勝利したプロシヤの君主制を解説したことなど、それに新政府になにかと強圧的にイギリス公使パークスに牽制する意図

もあつたのだらう。

一八七一年(明治四)、ドイツ陸軍軍医ミュレルと、海軍軍医ホフマンが、政府の招きで来日し、大学東校で医学を講義した。兩人は薬学教育の大切さも説いたから、翌年にはおなじドイツからニーウエルトが薬学主任として赴任した。こうして、ドイツ式医学・薬学が日本に根をおろそうとしていたときの翌年、欧米視察から戻った長与専齋(一八三六-一九〇三)も薬学は医学とともにあることを文部省に建議し、かれ自身もドイツ医薬を信奉した。

一八七二年(明治五)になると、文部省に医務課を新設し薬事を管掌させることにした。これらのこともあって、一八七四年(明治七)ようやく大学東校に製薬学科が開設された。さっそく、マルチン、ハンゼン、ランガルトらを招いたが、ここは薬学教育よりも製薬者を養成するためのものであり、洋薬が基本であったことはいうまでもない。

漢方を排除
すでに江戸時代も後期になると、蘭学の知識を無視しては学術活動ができないほどになっていた。

医学のみならず自然科学はとりわけそれが顕著といつてよいのだらう。つぎつぎと舶載されるヨーロッパの原書や蘭訳書の学習を通じて、とにかく、いわゆる洋学がいやがうえにもさかんになってきた。

一八一九年(文政二)になると、宇田川玄真(一七六八-一八三四)は蘭学の薬学書である『和蘭薬鏡』を著作した。これが刺激となつて、このあと生理学・医学・植物学などの諸書の紹介がみられるようになった。

あまりの蘭学ばやりに、一八四九年(嘉永二)には幕府の奥・表医師が外科・眼科のほかは蘭法を用いることを禁止し、さらに医薬書の出版は医学館の許可制にした。この処置を試みたものの、いわゆる漢方は時代にとりのこされるままに過ぎた。

一八五八年(安政五)、將軍家定の病いは幕府の奥医師たちでは治療のめどがたたず、やむなく官医に西洋医術を許

可し、伊東玄朴(一八〇〇-一八七〇)らを幕府の官医とするありさまとなった。そればかりでなく江戸の開業医らは、この年、神田のお玉が池に種痘所を設置するほどになり、翌々年になると種痘所を官營にさせている。そうになると、ここが西洋医学の拠点になって、漢方は主流からはずれてゆく。

漢方の抵抗

はじめは曲折をみたものの、明治政府はドイツ医学を正式なものにしたから、洋学派の中心である石黒忠愷(一八四五-一九四二)・長与専齋らはその勢いにのつた。一八七五年(明治八)、全面的な西洋医学へのみちを開こうとし、医術開業試験は物理・化学・解剖・生理・病理・内科・外科・薬剤学の課目で実施することにした。この年の全国開業医は漢方医一万四八〇七人、洋医五〇九八人、漢洋医二五二四人、そのほか八五六人(衛生局統計)であったから、漢方医はこの方策に反対し、「医術開業試験に漢方の一科を加えること」の運動をくりかえした。

引きつづいていたこの運動は、たとえば一八九一年(明治二四)、帝國議會へ全国三七団体、一九八〇人の漢方医、五万余人の署名請願書を提出するまでになった。が、議會は解散し、審議未了となる。請願そして審議未了はくりかえされるが、ようやく一八九五年(明治二八)の議會になって、運動は成功するかにみえたが、二七票の差で否定された。漢方は科学的説明がなされないまま、近代医学の名のもとに医制からはずされてしまったのである。

2 売薬の需要

薬種流通の変化

地元の大和で採集される薬種の数多いことは、前章までに述べられたとおりである。しかし、薬効をあげるためには舶来薬種が案外早くから使われていた。その外国薬種はながいあいだ幕府の貿易

可し、伊東玄朴（一八〇〇—一八七〇）らを幕府の官医とするありさまとなった。そればかりでなく江戸の開業医らは、この年、神田のお玉が池に種痘所を設置するほどになり、翌々年になると種痘所を官営にさせている。そうになると、ここが西洋医学の拠点になって、漢方は主流からはずれてゆく。

漢方の抵抗

はじめは曲折をみたものの、明治政府はドイツ医学を正式なものにしたから、洋学派の中心である石黒忠恵（ただのり一八四五—一九四五）・長与専斎らはその勢いにのった。一八七五年（明治八）、全面的な西洋医学へのみちを開こうとし、医術開業試験は物理・化学・解剖・生理・病理・内科・外科・薬剤学の課目で実施することにした。この年の全国開業医は漢方医一万四八〇七人、洋医五〇九八八人、漢洋医二五二四人、そのほか八五六人（衛生局統計）であったから、漢方医はこの方策に反対し、「医術開業試験に漢方の一科を加えること」の運動をくりかえした。

引きつづいていたこの運動は、たとえば一八九一年（明治二四）、帝国議會へ全国三七団体、一九八〇人の漢方医、五万余人の署名請願書を提出するまでになった。が、議会は解散し、審議未了となる。請願そして審議未了はくりかえされるが、ようやく一八九五年（明治二八）の議會になって、運動は成功するかにみえたが、二七票の差で否定された。漢方は科学的説明がなされないまま、近代医学の名のもとに医制からはずされてしまったのである。

2 売薬の需要

薬種流通の変化

地元の大和で採集される薬種の数多いことは、前章までに述べられたとおりである。しかし、薬効をあげるためには舶来薬種が案外早くから使われていた。その外国薬種はながいあいだ幕府の貿易